

## 1. 一般国民における循環器疾患危険因子の認知度および危険因子保有と認知度との関連：NIPPON DATA2010

研究協力者 永井 雅人（東北大学東北メディカル・バルニク機構災害交通医療情報学寄附研究部門 助教）  
研究分担者 大久保孝義（帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座 教授）  
研究分担者 門田 文（滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任准教授）  
研究協力者 宮川 尚子（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 特任助教）  
研究分担者 村上 義孝（東邦大学医学部社会医学講座医療統計学分野 教授）  
研究分担者 高嶋 直敬（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 助教）  
研究分担者 奥田奈賀子（人間総合科学大学人間科学部健康栄養学科 教授）  
研究協力者 東山 綾（国立循環器病研究センター予防医学・疫学情報部 室長）  
研究分担者 早川 岳人（立命館大学衣笠総合研究機構地域健康社会学研究プロジェクト 教授）  
研究分担者 藤吉 朗（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 准教授）  
研究協力者 中村 好一（自治医科大学地域医療学センター公衆衛生学部門 教授）  
研究分担者 岡村 智教（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学 教授）  
研究分担者 上島 弘嗣（滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任教授）  
研究分担者 岡山 明（生活習慣病予防研究センター 代表）  
研究代表者 三浦 克之（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 教授）  
NIPPON DATA2010 研究グループ

### 1 背景

健康に関する正しい知識を持つことは、健康的な生活習慣を目指した行動変容に有用である。したがって、危険因子の予防には、循環器疾患の危険因子を正しく認識することが重要である。

そこで本研究では、平成 22 年国民健康・栄養調査と並行して地域的に偏りが無い国民集団を対象に行われた「循環器病の予防に関する調査 (NIPPON DATA2010)」において、循環器疾患の危険因子に関する認知度、および危険因子保有の有無と認知度との関連について検討した。

### 2 方法

全国から無作為抽出された 300 地区で実施された平成 22 年国民健康・栄養調査の 20 歳以上の血液検査受検者を対象とし、NIPPON DATA2010 を実施した。3,873 名中 2,898 名（年齢：20～91 歳、応諾率：74.8%）の参加同意を得た。解析対象者はこのうち、平成 22 年国民健康・栄養調査のデータと突合可能であった 2,891 名（男性：1,236 名、女性：1,655 名）である。

参加者に対し、「心筋梗塞または脳卒中の原因として正しいと思うもの」を 10 項目から全て選択するよう求めた。正答は「高血圧」、「高コレステロール血症」、「糖尿病」、「喫煙」、「不整脈」、「HDL コレステロール（善玉コレステロール）低値」である。循環器疾患の原因として正

しいと回答した各割合を性・10歳年齢階級別に集計し、カイ二乗検定を実施した。また、高血圧（収縮期血圧/拡張期血圧値 140 mmHg/90 mmHg、または降圧薬の服用）、糖尿病（食後8時間以内もしくは食後時間不明者の血糖値 200 mg/dl、食後8時間以上の者の血糖値 126 mg/dl、ヘモグロビン A1c (NGSP 値) 6.5%、または血糖降下薬による治療）、高コレステロール血症（総コレステロール値 220 mg/dl、または脂質降下薬の服用）、低 HDL コレステロール血症（HDL コレステロール値 < 40 mg/dl）、喫煙（非喫煙、過去の喫煙、現在喫煙）、脳卒中の既往歴、虚血性心疾患の既往歴の有無別に認知度を集計し、各危険因子を正しく認知している年齢調整オッズ比と 95%信頼区間を、多変量ロジスティック回帰分析より性別に算出した。

### 3 結果

循環器疾患危険因子の認知度は高い方から順に、高血圧、高コレステロール血症、喫煙、不整脈、糖尿病、HDL コレステロール低値であり、それぞれ 85.8%、72.6%、58.5%、49.8%、45.1%、38.5%であった。高コレステロール血症、糖尿病を除き、認知度は有意な性差を示した。また、年齢階級別では中年者が高く、若年者および高齢者で低い傾向がみられた。

各危険因子を有さない者を基準にすると、高血圧、高コレステロール血症、糖尿病、現在喫煙、過去の喫煙習慣を有する者は、保有している危険因子が循環器疾患危険因子であると認知しているオッズ比が高い傾向であった。男性では高血圧者の高血圧認知度（オッズ比：1.49、95%信頼区間：1.05-2.12）、高コレステロール血症を有する者の高コレステロール血症認知度（1.46、1.11-1.92）、過去の喫煙習慣を有する者で喫煙に関する認知度（1.33、1.004-1.77）、糖尿病者の糖尿病認知度（2.73、1.94-3.84）、女性では高コレステロール血症を有する者の高コレステロール血症認知度（1.55、1.21-1.98）、過去の喫煙習慣を有する者で喫煙に関する認知度（1.54、1.07-2.22）、糖尿病者の糖尿病認知度（1.80、1.26-2.56）で有意な上昇が観察された。一方、自らが保有していない他の危険因子についての認知度は非保有者と変わらない、もしくは低い傾向であった。また、虚血性心疾患または脳卒中の既往がない者を基準とした時、それぞれの既往歴がある者の危険因子の認知度は一部を除き有意な差は無かった。

### 4 結論

循環器疾患危険因子に関する正しい知識の認知度は、性・年齢階級別に差がみられた。また危険因子をすでに保有する人々における認知度は、当該危険因子に対する認知度のみが非保有者よりも高いことが明らかになった。一方、虚血性心疾患または脳卒中の既往歴の有無による認知度の違いは一部を除き観察されなかった。循環器疾患予防のため認知度の低い危険因子の知識を定着させるためには、性・年齢階級別の対策を立案・実行し、特に危険因子の保有者に対して保有していない他の危険因子に対する知識を高めることが必要である。

**日循予防誌. 2016;21(3)166-175.**